

Summary, 10 November, 2022

日時：2022年11月10日 17:00～18:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

「オトマンゲ諸語の声調有標性について：マサテク語とチナンテク語の事例から」

講演者：中本 舜（メキシコ国立自治大学 メソアメリカ研究科博士課程）

声調体系の分析においては、声調規則の影響を受けやすい声調素と受けにくい声調素があるとき、影響を受けやすい声調素を構造的に無標な声調と分析することがある。Maddieson (1976)は声調有標性を通言語的に比較し、3段階以上の声調がある場合中声調が無標であると一般化した。一方で、3段階の声調を持つオトマンゲ語族のイスカテク語、チャティノ語センソンテペク方言、サポテク語テオティトラン方言、トラパネク語などで最低声調が無標ということが知られている。しかしながら、同オトマンゲ語族でも4段階あるいは5段階の声調をもつマサテク語やチナンテク語の事例は取り上げられてこなかった。本発表では、4段階の声調を持つマサテク語チキウィトラン方言とチナンテク語ララナ方言の例をとりあげ、一般的に最低声調が無標といえるものの、声調規則によって影響を受けやすい声調が異なることを報告した。

マサテク語チキウィトラン方言は/1 13(4) 2 3(3) 3(4) 34 4/からなる声調目録を持ち/1/を最低声調とするが、変調、声調拡張、連続変調、声調遅延、声調削除などの基準によれば、/1/が一貫して無標な声調素といえる一方、/2 34 4/も声調規則の影響を被りうる。

チナンテク語ララナ方言は/Ø 1 12 14 2 21 23 3 31 4 41/からなる声調目録を持ち/Ø/を最低声調とするが、変調や声調中和に基けば、/Ø/が一貫して無標といえる一方、11 ある声調素のうち/4 41/以外の9つが声調規則の影響を被りうる。